

〔曲名〕 Dante e Beatrice

ダンテとベアトリーチェ

〔曲種〕 Meditazione

〔作曲者〕 Carlo Graziani-Walter

カルロ グラツィアーニ ワルテル

〔編曲〕 Jiro Nakano

中野二郎

作者については第一集解説で述べているので省略するが、イタリアでマンドリン音楽が興隆した頭初
フィレンツェにあつて重きを為した人で

かの著名な皇后マルゲリータ陛下マンドリン合奏団の指揮者であつた。

経歴から云えばムニエルの先輩格で音楽面での活躍範囲が広く作品の数も非常に多い。

アメリカのマンドリニスト、サミュエル・アデルタインが19世紀末にマンドリンの演奏技術習得の為に渡
欧した時の手記によれば、

「1897年私はその当時のこのクラブ(マルゲリータマンドリン合奏団)の指揮者であつたグラツィアーニワ
ルテル氏から、

第138回演奏会のプログラムを受取つた。

夫には1897年5月31日国王皇后両陛下の御臨幸を仰ぎサルヴィーニ皇室劇場に於いて開催する旨が記さ
れてあつた。

曲目は全部指揮者グラツィアーニワルテルの作曲或は整曲したもので

1. 幻想曲「ノルマ」
2. マントリンオーケストラ伴奏付セロ独奏「亡命者」
3. 合唱及マンドリンオーケストラ伴奏付ソプラノ及テノール合唱「ヴェネツィアの物語」

4. 組曲「村祭」

5. 「ラ.ポエム」

等であった。

このプログラムに記された曲を1880年ベルレンギの指揮下に演奏せられた当時の曲と比較すれば実に隔世の感がある。云々」

之によっても我々は当時の様想を恒間見ることが出来る。

ベルレンギの作品の中にGemme Musicaliと題するマンドリン合奏曲があり、

トニゼツティ、ヴェルディ、ペトレーラ等の著名歌劇の綜合曲であるが、之がグラツィアーニワルテルに贈られてあり、

伯爵であったことが記されてある。

本曲「ダンテとベアトリーチエ」は作者の代表作の一つで19世紀末フィレンツェのG.Venturini出版社から出版されたが、

1905年にはミラノのCarischに併合され更に何版も重ねられた。

楽器編成も二十種ほどあり小編成のマンドリン合奏から小管弦楽、大管弦楽、吹奏楽、ピアノ独奏、二重奏等凡ゆる形で出版を見た。

ハープ又はピアノの無い場合のギターパートはマンドリンオーケストラの中のギターパートとは違った形になっているので

そうした時の為にスコアの最下段に書添えておいた。

従ってこのパートをハープ又はピアノに重複して用いてはならない。

当時のマンドリン合奏曲楽譜の表紙はいづれもそれぞれ絵が添えられてあり、

美しいカラー（三版）印刷で文字も金泥を用い18世紀の名残りを留めた装飾文字である。

Venturini出版の初版によれば作者がLetizia Marcucci嬢と華燭の典を挙げるに際し彼女に贈ったもので彼女に対する愛のダンテとベアトリーチエに於けるが如く未来永劫変ることなさを示したもので更にダンテの神曲浄罪篇30章の一節が挙げられてある。

カリッシ出版社の手に移って再版せられた時はこの記念すべき文字は抹殺せられ、

遂には挿画もなくなりカタグ風の殺風景をものとなり謂れも知ることは出来ない。

否、曲そのものが出版社カリツシがレコード会社に轉身すると同時に此の世から抹殺されて了ったと見てよいだろう。

そんな意味でもこの曲は残しておきたい。

この曲はかつてフィレンツェにベアトリーチェに関する展覧会が催された時、作者の指揮によりマルゲリータ合奏団によって演奏せられ、

多大の賞賛を博したものである。

大詩人ダンテ・アリギューリとその不朽の愛人ベアトリーチェの物語はダンテの大作ディヴィナ・コムディと共に永久に伝えられるだろう。

作者の作品番号は433番まで判明しており、本曲は作品134番であるから初期に属し結婚までに相当の創作があったことがわかる。

オペラ、管弦楽、ピアノ、歌曲等作品は膨大（ぼうだい）な数に上るが記念の意味でマンドリンに関する作品のみを掲げておく。

イタリアマンドリン百曲選第8集より